

# 町民文芸



## 只見短歌会

二月詠草

大塚栄一

指導

人寄りて見上げる高き栗の枝に山繭の繭一つ下がりぬ

小倉キミ子

入れやりし湯タンポに足の温みしか人工透析の夫は眠りぬ

古川 英子

整備終へ水張られゆく田の面には舞ふが如くに初雪が降る

目黒 富子

常降らぬ各方面の大雪は交通麻痺の大混乱伝ふ

渡部ゆき子

入院の母を見舞へば様々な人ありと身の幸せを言ふ

新国由紀子

折紙を折りつつ思ふ遠き日の葉つつみし紙の折り鶴

関谷登美子

雪水をしとど吸ひしかどんど焼きのご神塔の燃えず気をもむ

五十嵐夏美

頑張りの利かなくなれど痛む腰庇ひて朝の雪道を踏む

馬場 八智

一枚の紙を手にして折り上ぐるさまさまの鶴に喜びはあり

渡部ヨリ子

若き日に友と登りし浅草岳臥す病棟の窓辺に遠し

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会

三月例会

目黒十一

指導

料峭や焚く紙屑の黒くまふ  
里山に迷ふておるよ雪女郎

礼

信

降りつづく春は名のみの寒さかな  
雪解けてぬつと顔だすふきのとう

修 一

見上げれば体を射抜く春日かな  
何事もなきがごとくに雪消えし

藤 彦

細雪眺めて飲むや夕餉どき  
氷柱噛むふつと友垣懐かしむ

邦 男

忘れ雪ゆうゆうクラブの椅子並ぶ  
ダンベルの握りをしかと隙間風

恒 夫

拝観を閉ざす山門春一番  
道行くや柂目模様は雪の層

又壺歩

春の川片足休め鷺の立つ  
横道を塞ぐ雪嵩ブルの音

昔から二月の雪を侮らず  
二月降る雪におびえるダムの村

順 子

昼日中シナモンの香の猫の恋  
復興の店の行列二月尽

リウコ

寒厨炊き上がるらし香り来る  
きさらぎや薬置屋に筆貫ふ

都

初髪を合わせ鏡に九十六の母  
物売りは演歌流して二月尽

洋 子

空に浮く雲どんよりと二月尽  
春の海猫は遠くを見ていたり

一 穂

春分や門雪払う竹箒  
カリカリと雪固まりて二月尽